

講演会 & ライブ な日々 ③⑩

古川 秀明

『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』

第四話・実践経過Ⅱ

②アディクション（依存症）

【概要】

この5年間で児童生徒1名、保護者1名に実施。

児童生徒の症状はゲーム依存。保護者はアルコール依存だった。

アルコール依存に関しては、本人の動機付け面接が大きな鍵となる。

依存症、特に薬物やアルコールに関しては、心理療法はなかなか歯が立たないのが現状。

医療機関や断酒会の協力は不可欠となる。

このケースに関しては、医師、精神保健福祉士、SC、SSWが協働。

特に精神科の医師もオープンダイアログに関して、病院内の精神保健福祉士の推薦もあり、協力的だった。

リフレクティングチームはSCとSSWが担当。

ゲーム依存に関しては、昨今、多くの保護者を悩ましている。

ゲーム依存と不登校、ひきこもり、発達の問題は常に紐づけられる。

このケース（アルコール依存症）に関しては、担任教師、養護教諭、SCがリフレクティングチームを組み、本人と家族を含めたオープンダイアログを実施。

【実践経過】

「京都府 K 高校(私学)1年男子まさしと、S 小学校6年女子あきこのケース」

*まさし、あきこはきょうだい(名前は全て仮名)

来談理由

- 古川がSCとして勤務する私学の高校に入学したまさし。
- ところがその年のGW明けから全く登校できず、このままでは留年が確定してしまうため、心配した担任からの紹介で来室。
- 朝は起きれないので、夕方からの面談となる。

まさしの状態

- 小学校5年生から不登校気味。
- 中学2年からほとんど登校できなくなった。
- 不登校だったが勉強はよくできた。
- とにかく人に会うのがしんどい。
- 朝、身体がだるくて起きられない。体重が減り続けている。
- 何もする気が起きないが、なんとか高校は卒業したい。
- 小学校も中学校も、それなりに楽しかった。
- いじめなどのトラブルもなく、友達もいた。
- 家ではほぼ部屋に閉じこもり、ゲームをしている。親の夫婦仲が最悪の状態。

【第一回面接：まさし、SC】

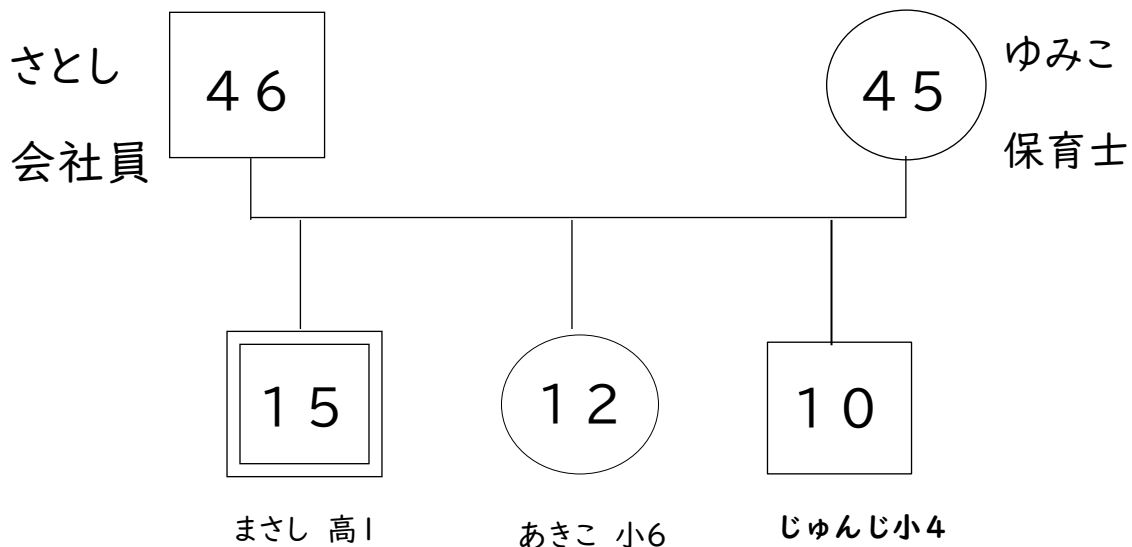
SC 「今、君が一番しんどいことは何？」

まさし 「お父さんとお母さんの仲が悪いことです」

SC 「私は家族療法が得意なので、両親のことは私が全部引き受けるから、君はがんばって登校してみたら？」

まさし「父と母が仲良くなれるなら、がんばって明日からでも登校します」

- ここからジェノグラム面接開始。



*名前は全て仮名です。

SC 「ところで君の出身中学はどこ？」

まさし「はい、K 中学です」

SC 「え？小学校は？」

まさし「S 小学校です」

SC 「俺、今 S 小学校で勤務してるよ」

まさし「そうなんですか。妹は今 S 小学校に通っています」

SC 「これは運がええな。この高校やと次の面接は2ヶ月か3ヶ月後になるから、小学校でも話が聞けるなら面接回数増やせるな」

まさし「家は小学校のすぐ裏にあるので、僕も近いし有難いです」

SC 「よしわかった。君の両親は高校と小学校のダブルでたっぷり時間をかけて俺が夫婦カウンセリングするから、君は約束通り、学校に行き」

まさし「わかりました。よろしくお願いします」

- 翌日から、約束通りまさしが登校を始める。
- 久しぶりの登校、かなりヨレヨレ、フラフラ状態で、心配した担任と養護教諭が「しんどかったら保健室で休むか、家に帰ってもいいよ」と言ったが、「カウンセラーさんと約束したから、最後まで授業に出ます」と言ってがんばり、その日から休むことはなかった。

【小学校の情報】

- 養護教諭の先生は永く S 小学校におられるベテランで、まさしのこともよく覚えておられた。
- 成績はとても良かったが、4年生くらいから急に元気がなくなり、休みがちになった。
- 妹も休むことがあり、登校しても休み時間の度に必ず保健室に来て、保健の先生に「なんかしんどい」と訴える。
- SC が「とにかく両親を呼んでほしい」と担任を通じて親に連絡すると、両親とも「すぐにでもカウンセラーに会いたい」との返事をもらう。

【第二回面接：SC、両親】

父 「どうも、この度はうちの子どものことで大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません。また私達親の為に貴重なお時間を取っていただき本当にすみません」

- なんて丁寧なお父さんなんだろう。好感度100%！！
- それにひきかえ、お母さんはずっと壁のほうを向いて、夫の隣に座ってはいるが、身体を斜めにして少しでも夫から離れようとしているように見えた。

SC 「実はまさしくんに、お父さんとお母さんの夫婦仲を何とかしてくれと言われてまして。ご両親の関係は自分の不登校よりも重大問題みたいです」

父 「いや、お恥ずかしい話ですが、私達夫婦がうまくいっていないのは事実です。ずっと妻は家の中で口をきいてくれません。僕にはその理由がよく理解できないんです」

- その言葉を聞いて奥さんが、「はあ〜」と、怒りとあきらめに満ちた、深いため息をつきました。
- 私はあんなに悪意と絶望に満ちた、ダークでブラックな、人間のため息を聞いたのは初めてでした。

SC 「お母さん、今のため息にはどんな意味が？」

- さっきは深いため息で息を吐いて、今度は思いっきり息を吸い込んで一気にまくしたてはりました。

母 「酒です！酒！みんなこの人のお酒のせいです！そやのに、なに！僕にはその理由が理解できない！？はあ？それが何よりの問題です！自分のやっ

てることが何もわかってない！酒のせいでわたしら家族がどんなに苦しめられているのか、何もわかってない！しかも、その理由がわからないって、ようそんなことが言えるもんやな！

SC 「まあまあまあ、お母さん、いっぺん落ち着きましょう、いっぺん落ち着きましょう。お父さん、お酒飲まはりますの？なんか思い当たることないんですか？」

父 「正直言ってお酒は好きですし、仕事が終わって家に帰ってから晩酌をたしなむのが唯一の楽しみです」

SC 「まあ、そんな人はたくさんやりますわな。そやけど、めちゃくちゃ奥さん怒ってはりますで」

父 「妻の機嫌が悪いのはいつものことなので、僕は気にしません」

● その言葉を聞いた奥さんの眉間にシワがよって、額に青筋が立ち、今にも夫に襲いかかりそうなオーラが出ていました。

SC 「ちょっとくらい気にしゃはったほうがよろしいで。奥さん、怒りモードの大魔神みたいな顔してはりますで」

父 「妻には妻の言い分があるでしょうから、良かったら聞いてあげてください。私がいくら妻と話しても、妻とは話がかみ合わないの」

SC 「了解しました。それではお母さま、ご意見をどうぞ！」



母 「何が家に帰ってから晩酌を楽しむや。帰って来た時にはもうすでにグデングデンやないか。帰ってきたらいきなり玄関の戸をガンガン叩いて、『早く開けろ！何やってんだ！早く開けろ！』と怒鳴りまくって、ドアを開けたら、『お帰りなさいくらい言え！』ってまた怒鳴って、そのまま冷蔵庫に直行してビールを持ってきて、机をバンバン叩きながら『子どもらと呼ばべ！なんでお帰りなさいの挨拶をさせへんのや！』子どもは怖がって部屋から降りてこないというたら、『今すぐ呼んで来い！来ないなら俺が行っ

て呼んでくる!』と言って子ども部屋のドアをまたガンガン蹴って、子どもが泣き出したら『なんで泣くんや!』と言って窓ガラスを何枚も割って・・・」

SC「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。それ実話ですか？」

母「全部実話です。嘘やと思ったら隣近所の人に聞いてください」

SC「お父さん、ほんまですか？」

父「妻は僕にそう言いますが、正直、僕はあまり覚えてないんです。ただ、朝に部屋を見たらガラスが割れてたり、ドアが壊れてたりしていることは何度かありました」

SC「う～む、酒飲みによある、酔った時の記憶がない『ブラックアウト』というやつですな。奥さん、他には・・・」

母「家に帰ったらすぐに、みんなが見ていたテレビを消して、自分の話を延々と聞かせます」

SC「延々と、と言いますと？」

母「ひどい時には明け方まで怒鳴り続けます。外に逃げようとする、また机をバンバン叩いたりビール瓶を投げつけたりします」

SC「お父さん、そらあきませんで。酒は飲んでも飲まれるなて言いますやろ。奥さんや子どもに迷惑かけるような飲みかたしたら嫌われるの当たり前ですよ」

母「うちの家族がめちゃくちゃになったのはみんなこの人が悪いんです」

父「妻はいつもこう言いますが、そうなのかなあ、全部僕が悪いのかなあ」

SC「と言いますと？」

父「家に帰っても誰も僕と話してくれない、僕のそばにも来ない、一生懸命働いても家族に無視されたら、先生・・・誰だって愚痴のひとつでも言いたくなりませんか・・・」

SC「それはそうですけど、愚痴の域をはるかに超えて、虐待の域に入っているような」

母「そうです。これは立派な虐待です。DV です。つかまえて警察でも病院でも放り込んでください」

父「妻は興奮してこう言いますが、みんな僕が悪いのかなあ」

母「まだそんなこと言うてんの! あんたがお酒飲んで無茶苦茶するからや」

父「父親の話を家族が聞くのは当たり前なんじゃないかな」

母「話を聞くて、3時間も4時間もおんなじ話をグルグルグルグル聞かされるもの身にもなってみ」

*もの凄く丁寧な物腰の父親と、阿修羅のごとく興奮した母親の緊迫した水掛け

論が続き、この日の面接は終了。

第三回面接：SC、母親、妹（あきこ）

- あきこもカウンセリングを希望したが、男のカウンセラーと二人は怖いからということで、母親も同席。
- 面接の中であきこが、授業中知らない男の人の声が聞こえてきたり、知らない男の人が見ているような気がして怖くなると訴える。
- それはお父さんの声ではないの？と聞くと、違う、もっと怖い声と答える。
- お家でも聞こえるの？と聞くと、一人で部屋にいたら聞こえてくる、寝る前や夜中にも聞こえてくる時があると答える。
- 母親も知らなかったようで、驚いていた。
- 母親も終始泣いており、ずっと心療内科に通っていてうつ病と診断され、抗うつ薬と眠剤を服用しているとのこと。
- また、時々「もう死にたい」という気持ちが強く湧いてくると訴える。
- あきこに両親のことを尋ねると、お父さんはお酒を飲むと人が変わって怖いし、お母さんがかわいそう。夫婦喧嘩をやめて欲しいと泣きながら訴えた。
- あきこの担任教師によると、授業中急に「うわあ～」と両耳を塞いで叫んだり、理由もないのに男の子を蹴飛ばしたりすることがあった。

その後の面接

- とりあえず、子どもの症状と母親の状態を考えると、父親に酒をやめてもらうしかないが、父親はそこだけはかたくなに「僕はやめたくありません」の一点張り。
- 妻や子の症状を考えればもうやめるしかないのでは？と言っても「僕だけが変わらないといけないのでしょうか？」「僕だけが悪いのでしょうか？」「家族はみんな協力して変わらないといけないのではありませんか？」などの意見を出して、同じところをグルグル回る。
- ただ、父親は酒を飲んで暴言や器物破損はあるが、妻や子に直接暴力を振るうことは一度もなかった。

{長くなるので、続きは次回に掲載します}

最後までお読みくださり、ありがとうございました。

ふるかわひであき